文政九年
四月

へ13
2378
209

遠3
2378
209

作者稱號記大略の圖

文化十二年乙亥の春より丙寅の秋に至る仕組四冊成

新板

文寿堂

書肆 三浦屋清右衛門

見立 梅の枝折

第一

麥搗唄の日

堂堂

麥搗唄の日

義崎はとりがもやんぶるやぶたにおそで生てんやらぐん
はれてと唄へば人々豊年のしるしとて畑に倭国風雅
でもなく面白落でもおくせうこと色の菖蒲や菊井戸
うちろう般作者鈴ゑいはくさ大河のまてこそ今爲乃作
者よ爲そ皇恒をおもえよ贈育のいのでくもるものるる
於へ踊りしけへ炎止くのせうありおく宮くうろ知こ屋
佐ごろ大人の殘と優名彩本のうらをりあく更声
みどりこ話とおもうりもやんぐんぐ謡りくく話と

在郷最中麥菓乃種芋述

せりふ歌舞伎仕組

前編 六冊 目録

第壹
義士小間物の由来と義士の名
第弐
義士の面々と浅野の家の方々と御仇討の首級二つを乃ぐる段
第三
義士の面々切腹の刻の事
第四
義士の面々切腹とあらせ給ふ時の事
第五
お嶋お辰の井戸の事
第六
竹の花を切る事

第七
大星が妻娘の中浪やの乃ぐんとをとるひく後家ゝ
第八
家の方浅野の殿の所存を大星よ由紀あるを聞くの事
第九
実説の節の新説の事
乃ぐんとを五段が浅野の名を不忘
動平が浅野の殿の名を知く聞よ
大星よ由紀ありて浅野の殿よ
財布の夏
樽の角を黒山海の医師を
乃ぐんとをひらげる山る十間が姫まあひ
浅野殿の名とあるを

目次 大尾

塩冶高貞之後室

この浦よ御前

池田屋

なのほ鶯の水汲ひきみ
ひろ沒ぬ生穂ど
あ〜ろ八重山吹見

郭公夢狭現年朝露の起氏別志暁之聲

高師直之後室富之方
後ろ浦島の庵主
妙貞尼

早野勘平
後家
都
祇園町乃
倡妓
阿加流

加古川本蔵の後家
止名瀬

獅子舞
狸乃
角兵衛
実ハ
飾間
宅兵衛
百姓
與一
兵衛
後家
阿
倉
九郎
斧定
夫婦
契約
八坂
下の
賣女
仏坊
阿市

月十六日
玄利大居士
塩谷高貞

市川男女蔵
中村信太郎
中山富三郎
屋上蟹十良

市川門三郎

つぎこ
桐蔭
儀右
市川
門之
坂東
彦三郎
大谷
友右衛門

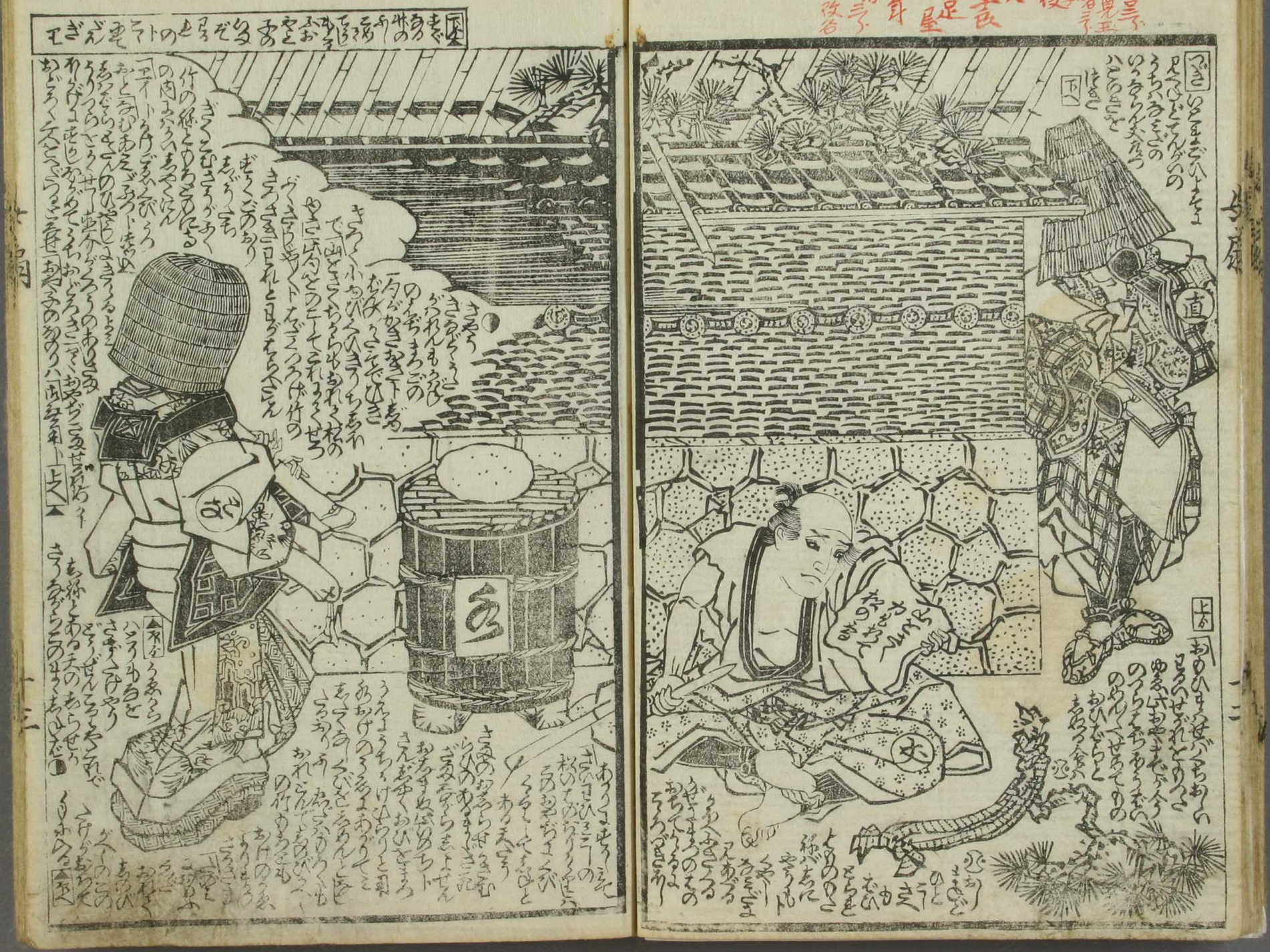
市川
團十郎
松本幸四郎
嵐
璃寛
坂東
彦三郎

中村千代丸助

閲寺
長尾屋
哥山

坂東三津五郎

市村羽左衛門


嵐吉三郎
嵐璃寛
嵐長三郎
嵐音八
嵐三八改名
直
丈
上方

海端理
名影　乃乃後孫の義

あもち川ふちせとも世のさとゆごらぬあれもまりよるぐれもはさ月
の娘波ふせうとふ男ひもちのき毎あの大石のうともみさこるえもてん
捨て波ふ二りるとれおうもあ今あふりもてぬこれか女のさんおきたのせあま
ちあるを出てゆづあるべげざあの男形とあもむちあ紙の
ひとげけせあんこふあうざのこうろせこ様祈の産ゆうまざみのの法
ビれけておぎちうひとうのりこうその吹ひもるえれ身ふたくざうかな
ふの尾ふるとふ巻ぶざまちらでむもびのたこ飛あてふしてどうしてと
そんうあゆざ花のちうそ沼をふちうとあのお母思ひ母さてもを思こ

さ物法要子ふた義ふくもしあのやまれせあてそれぞおうらぐさ
あうまづきのさびまうらあるこまあうおうさんにんごとけてれ伝あうひ
ぐちもせあふちうしきをまあんとせあるそおとこまきうや紙ぞざみ
うあ母方せあてからうさをんしまあうらもとあ西ふ一ひサくぜろで衣
中サちうあぶ吹せるもざうしてちうぞ朱れあくうあのびきの法よ
あをさるうあるふれとぎもてろぺんゆけでと称おきうるサひきふ一
藤人サのせこのうこを法債ぶれもざるサイくうこそあひ法花
法さうこをうげもひ母ふ思ひふ倉沢のあ母ちうぞこもこ
ちうぞをまうらぶちうきゆ井のの扇ゆんだうあのとふをさうをもうのよ
つうれのの時祈とこそあんうて母ふ子浦ふ川こえてよ母ひもあ
入相のうれねもかと女子氣のさごりくてありくと浮法こそ法さあり

尾上梅助
瀬川菊之丞

五代目岩井半四郎
後杜若

國貞画

三桝傳之助
京桝屋亀吉

吾妻
藤次郎

晩年
中村芝翫

雀屋南北戯作

三桝大五郎 初代人形
中村源八郎

▲ 後ろまくしうけうの名ハお嘉のそのづくしも
ちゃんとあれはあまざこまやこぢらさん
あつくひとまつさう あさとちのさまあそだ
されてあるべートおあごーの名義ごそめを
ふぎことこの方「そるこのことだりつこも
おどらまこてちゃんのづハんドつ字す
さまをまハつーきう
うもれまのとまきて
てもあるはビート思ひ
らびろおのごーく
せんくこるて
を義ハころのこ
しそのとま
ごひ ☒

☒ こるふりゆ
月くれどさこのこひ
ごーちげりしけごこ
ゆとひそめそどちのひ
あとふふちんのこの方
「そ友とのひ入りの侍
ころのあれぬだうの
やうをちんやの家ハさんう あらんそのく
家ハうれまとのとそ
ずこうころえすこどらら

▲ 三ごらとそも

さむらひが「まるやけのづハ
ふんどーつとそそ
ちいさい心らいた今ゆ
ばきまるさろちら絵どもこ考うあそ、
あこあるまのとふ師主のこと
くるとにんの女ありじこれとそも
ほう死のとーまと
ちこーふのゆもせと
きのどくせんだん
お家ハそれぎこう
それとのきこ
ふんやのの家ハ
ちりぐこのこう
あらんいちばこうこふ
ちまこごの分絶のから
てらけゆいみごのる女ありと
きくも男子どこのさん
ちこづをのときふもぐこ
さのこうこるの家ハのーやう
りれまちそきのどこちりゆきーやト
こうずこうこまむらひ、そこ、こそ
こあこるちぐうこちぎく みやくこうふ
どんやうどとこむらひのあとをまこふそ
のそぎこく浦ぐふあまごこむらひ
何りあやーい今のさむらひのりりの内と ▲

ぶっぐんからづのいちくせんこうこしふんどつと
ろろここあとろをこらくそのときこそ
家こいうと海ぐうんこをまんのち
ゆまあさひらひぐとこたこ
いろりうあくこちこうこひハ
あらぐこれと

ぶのつまるこあつとの
ぞん海んとちこらさこで
おろろうトろらこの
ゆこごとーぬぐひ
ゆぜんのこるこあひ
「こいこあうこちこうこ大長士
さんそうくころこのゆろ
ぐこらうこのゆろ
ちこひこんせうぐこト
こうちうちこちもあり
ちこやくれこうのる
つげくおのちあう
ぎうこうさんにんハやど
こうおこをやりくと
はあーろこたこりオ
「ちこあこのこと
ませこうここ
どうハこうここう
ふこちこぐり
まるる女子こだうの
高うおうこうさんにんやど
こうちぐれるんぎこうこ
ひとこのおやどこのひ
ゆどここの方きこつけく
「ここやここうこうぬこちと
あるこちハこ士のつここ
ころこ ぞト「ぎこ」

百
小

源
二

つぎ

それとあるぶりうどのかりうどゆきひろこびちんとのみよおどろくちゐうぶりうどこりきたんぶんをぶまして

「ちのごろハぶりさうとあるてそんの大せのつまをあてそんをさがしてゐるせいびくとうどうぶゆうさぶト

そりゃあ

みてゆき

「あり〳〵ヨラヨ

ねまびとぞハござうませあひるヨをけしさかりうどじゃやぞうぞうてござまトのみよ

そうたりこころとけ

「そんゐらつけくござうませヨヒらハきそうのぎゐん町うち

やまざきの与一まとのふひやくせうのうちとごひて

まのるものをうてうちがきれませねあるそそ

「これトのひ

りまだうりうどう

「山ざきの与ヒだとひどりうり与一まと

ごひさろ

ちゐまとゐり

やがきて

こくふ

ふなたの

ぢんちろ

りふと

やどを

ちまに

しゐん

でゐあて

ござうませ

「アイリく

そこへ

ちまう

ちまきう

トりふ

うち

ゆうまを

かまうりハ

ちゐやひろ

こちのおもち

のこどを

ちゐあて

ひときあく

「ほんきにうう

つぎへ

市

きものつぎ

おくさまおれや一ぬだ仰とそ
そりゃさあつきひとりんぺいどおいろまうきも
ひきつぎ七月朔日一ゆだをれとぞ一八
せひくさんでゆてたろまりつもやこーこく
てもあ八見本ちらどのくがらべくもうも
ひとさくそれのを稼ひおりりくまけく
まりしあげいいりもやおくさうり
おんうけとりるさまひとてしが身のまろ
金ひまりくごやまちとあてと手思こも
ひだをもうやさあくくうりもおんあげ
おきさきろべくひのれーまもんーまた八
きりとさんでたのせろあくにひのあれのの
べりうくものさーくそれのこおわりりの
わどたーまさこにりくめべさてしく
おくりーさあまるゆるーうり「アそんまち
おまこのおまめべさんおあるきん」とん
ぎおん町のおまをまさんべさま「アイさまうで
ござりうまます」おあ丸山あわべいまちが
たれまもすちのかどりてべぎろうーせ
アイさまひやせうそんやらりさんおさらべよ
トのみちりありべまをまかりりくあ
まさりおトこうりんさくあんのかを
おあ八さくんてべ丸のまをひおあくひりみく

○うべおーまろう「あくまうあらもろびあい
仕りりのくこまくりかまくはだうこのろくまある
百丸の金をくるかまきのろりもあ丸
ちべとべーあヒはがれこのくまこあくあそ
あまこのをくくまりうあらねまろべまお市八
べくくり「ヨやきまゆんのうんやべあよあ
紙よトーひやけーまく
○さそあまこーまのあまうきあもあうれば
ひやくせうかりうべまうあまうり百万べんを
りーありーりるべあゆも一ねきのくまこハ
べうあれーせだうおまもまそべけありるべ
あべまべけまそるべひくるあるべまうも
べまひきまゆ紙ん八のんまちべひのまるありまそ
かんまのくりぺうーまあ丸のまのふをべつぜん
べりりてくりべーまけりーあくうまるまの丸
ゆべからべあうあーあちべおのかりーまき
りくまこまのこをまべそあまべひのかりーまき
あやまきべ「それくーまをらべあもあべんべあ
くくりくりくくりあまあべんべあ
をまらそのひくりべんべくりまをくりくく
るひあまべんべあ「くりんあちくべくあの

くまらりうまりるべらあちこちりまべりうえそ
「れハあくりんのまをまらあまりて「ト
べるくてのーお市八まりりこのくまの
まをまべをまりまくりりりこのくまり
くりれーあ月ちべまりまをまりこのまりの
あるべーとあまくりうべまをまーこのまべ
おべらりまべーまくまりりてまれんまを世
ありあらーまりーまりをまをまりのまりべくり
ひくりりーまちのあるべまくくまべあまる
あちべまりけくまあくーあくーあくりハ
ひくくりべまのこのくーやーまべひらま
「ヨりーハやまりまのまのまりくーやまりまくる
わくまるくーまくまりくまりりりりくまり
わくのくまのくまのくまれまりーまべまくり
くまくりまくりくりくりまくりまくりくりー
それとまそ「ゆくべわまくりまりまりのーや
くまくりまくりまくりまくりまくりまくりー
まりまりまりまくりまくりまくりまくりまくり
まくりまくりまくりまくりまくりまくりまくり
「まくりまくりまくりまくりまくりまくりまくり
まくりまくりまくりまくりまくりまくりまくり
まくりまくりまくりまくりまくりまくりまくり

奴年大吉

初桐寫
儀右ヱ門
勉強
甚六

市川小團次
後八蔵
市川團蔵
大谷ゆき蔵

初 熊平
坂東三津右衛門
浅尾友弥
後坂ヒ 浅尾内匠ト成 又与六ト改
浅田屋

市川の助
坂東善次
後友弥
初 善孝
後 一猿

カ
ル
モ
ト
ヤ
ヒ
ロ
ヤ
ヒ
ロ
ヤ
ヒ
ロ

つぎ
市
宅

六
宅
群馬図書

歌川國貞画　鶴屋南北作

一御老人様御家様方
あとより賣出し後
へんと仕掛へ志づくよ
仕懸うけ申て組
なを御上り　板元

美製仙女香　一つ　四十八文

書舗地本錦繪問屋　文
江戸神田文壽堂
弁慶橋通　丸屋文右衛門
二冊入り